中原中也君の印象

萩原朔太郎

青空文庫

中原君の詩はよく讀んだが、個人としては極めて淺い知合だつた。前後を通じて僅か三回しか逢つて居ない。それも公會の席のことで、打ちとけて話したことはなかつた。ただ最後に「四季」の會で逢つた時だけは、いくらか落付いて話をした。その時中原君は、強度の神經衰弱で弱つてることを告白し、不斷に強迫觀念で苦しんでることを訴へた。話を聞くと僕も同じやうな病症なので、大に同情して慰め合つたが、それが中原君の印象に殘つたらしく、最近白水社から出した僕の本の批評に、僕の人物を評して「文學的苦勞人」と書いてる。その意味は、理解が廣くて對手の氣持ちがよく解る人（苦勞人）といふのである。僕のちよつとした言葉が、そんなに印象に殘つたことを考へると、中原君の生活はよほど孤獨のものであつたらしい。大體の文學者といふものは、殆んど皆一種の精神病者であり、その爲に絶えず惱んでゐるやうなものであるが、特に中原君の如き變質傾向の強い人で、同じ仲間の友人がなく、その苦痛を語り合ふ對手が居なかつたとしたら、生活は耐へがたいものだつたにちがひない。前の同じ文中で、中原君は僕のことを淫酒家と言つてるが、この言はむしろ中原君自身の方に適合する。つまり彼のアインザアムが、彼をドリンケンに惑溺させ、醉つて他人に食ひついたり、不平のクダを巻かさせたのだ。この酒癖の惡さには、大分友人たちも參つたらしいが、彼をさうした孤獨の境遇においたことに、周圍の責任がないでもない。つまり中原君の場合は、強迫觀念や被害妄想の苦痛を忘れようとして酒を飲み、却つて一層病症を惡くしたのだ。所でこの種の病氣とは、互にその同じ仲間同士で、苦惱を語り合ふことによつて慰せられるのだ。酒なんか飲んだところで仕方がないのだ。

中原の最近出したラムボオ譯詩集はよい出來だつた。ラムボオと中原君とは、その純情で虛無的な點や、我がままで人と交際できない點や、アナアキイで不良少年じみてる點や、特に變質者的な點で相似してゐる。ただちがふところは、ラムボオが透徹した知性人であつたに反し、中原君がむしろ殉情的な情緒人であつたといふ一事である。このセンチメントの純潔さが、彼の詩に於ける、最も尊いエスプリだつた。

青空文庫情報

底本：「萩原朔太郎全集　第九巻」筑摩書房
　　1976（昭和51）年5月25日初版発行
底本の親本：「文學界　第四巻第十二號」
　　1937（昭和12）年12月号
初出：「文學界　第四巻第十二號」
　　1937（昭和12）年12月号
入力：きりんの手紙
校正：ニオブ
2019年9月27日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（https://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

中原中也君の印象

萩原朔太郎

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/